

春岡村の伝説

・春岡村に伝わる物語三・

今回は春岡村の郷土史を編んだ銭場佐一郎さんが聞いた春岡の人々がきつねに化かされたお話(実話?)第一弾です。

●きつねのはなし その一

きつねは、現在では全く姿を消してしまっただが、明治二十年頃まではかなり沢山いたらしい。天理教会の隣、小沢日出夫さんの裏山や、東側の長老坊(深作字貝崎にあった宝積寺の隠居所、現在の貝崎公園付近)近辺では時々網で捕まえたことがある、と父銭場佐一郎は言っていた。従って、当時は狐に化かされるという人もかなりいたらしい。

本田徳太郎さんなどはその最たるもので、時々この難に遭ったといっている。

彼は若い頃、馬車曳きをしていたが、夜おそくなって小深作の大道(現在の春里中学校のところ)は道が狭いうえに、東側も西側も山林で昼でも暗かった。道を通って帰ろうとすると、どうしたことか急に気が遠くなり、道が分からなくなってしまう。現在高圧線の通っているあたりだろう、畑の中に立派な格子戸の入口のある家などを見せられたことがあると徳太郎さんはよくいっていた。

田中仲次郎さんは、岩槻からの帰り道、どこでどうなったのか分からないが、深作の西郭にさしかかると気が朦朧となり、畑中を一夜中歩き廻っていたとのことである。

これも岩槻からの帰りであるが、遠藤豊吉さんは、岩槻の町

を離れて蓮田街道に出た。丁度その日は小雨が降っていて、外は真っ暗だったのに、素敵な美人が蛇の目の傘をさしてくるので、目をまるくして見ると、顔貌といい、着ている衣類の縞柄といいハッキリと見られる。こんな暗闇の晩に不思議だな、と思つてその足元を見たところ、毛が一杯生えているので驚いて畑中を夢中で走り続けて来たところ、野狐の棲んでいる新溜稲荷のところに出現してしまったとよく話されたことがある。

(つづく)

平山 由喜

狐

きつね
野狐也



出典・銭場佐一郎『思い出の春岡』(図書館蔵)
明治三十四年深作生まれ。就職の後、村の助役、村会議員を歴任。学生時代に春岡村の郷土史を編むことを志し昭和四十二年に完成。